

きゅうきむらけじゅうたく(きむらばんや)

# 旧木村家住宅 (木村番屋)

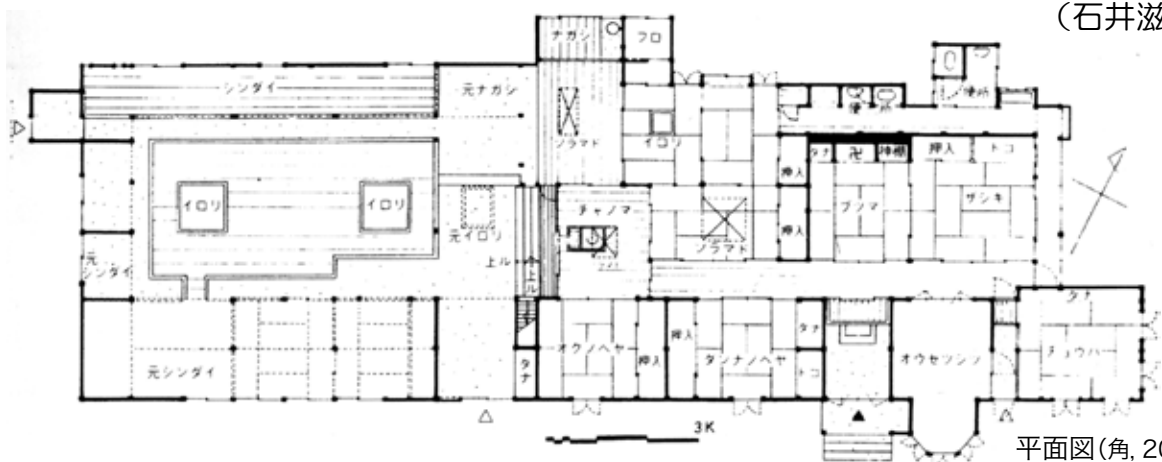
はまます こきひる  
 浜益区濃屋の港近くに、かつて「濃屋の殿様」と云われた木村家の番屋があります。この建物は明治33(1900)年頃に建てられたニシン番屋です。ニシン番屋は、経営者(親方)とその家族、漁夫等が漁期と一緒に生活し作業した建物です。

建物の特徴は、八角形の張り出し窓のついた応接間を持つ和洋折衷の作りになっていることです。応接間のある住宅は当時珍しく、周辺の村からも見物人が押し掛けたそうです。しかし実際に建築する上では、

日本つくりと西洋つくりを調和させるのは大変難しかったようです。平面構成は、玄関左7室が網元家族の住まいで、右半分が、仏間、洋風応接室、畳敷き帳場となっています。灯りは、石油ランプの時代には稀なアセチレン・ランプが使われていました。

津軽の竜飛崎の漁師だった木村家は、初代源右工門が文久(1861~1864年)年代に濃屋で鯨建網の経営を始めました。三代まで源右工門を襲名、四代源作、五代哲男、六代源作。当初は濃屋には定住せず漁期だけ濃屋に来る出稼漁業者でしたが、明治初(1968)年に小樽に移住、五代哲男が分家して濃屋に定住するようになりました。四代源作の明治25(1892)年頃には、鯨建網十力統を経営していました。六代源作の話によると、昭和29(1954)年には、九百石(一石は0.75トン)、1200万円(現在の2億円)の水揚げがあったそうです。

平成になって、寿司職人の菅原豊さんが建物を買い取って、平成12(2000)年頃から磯料理店「濃屋茶屋」を経営していましたが、今は閉店しています。菅原さんが見つけた、五代木村哲男が大正から昭和初期に撮影したニシン場の風景写真(ガラス乾板)200枚余りは、当時の様子を伝える貴重な資料です。



(石井滋朗)

平面図(角, 2007)

- (1) 浜益村(1980) 浜益村史. 浜益村.
- (2) 北海道建築士会編(1987) 北海道の開拓と建築. 第一法規株式会社.
- (3) 北海道近代建築研究会編(2004) 道南・道央の建築探訪. 北海道新聞社.
- (4) 北海道新聞社編(1971) 北海道の民家. 北苑社.
- (5) 角幸博(2007) 旧木村家住宅, 北海道近代和風建築. 北海道教育委員会.
- (6) 工藤義衛(2006) いしかり博物誌80・親方が撮った漁場風景. 広報いしかり2006年9月号. 石狩市.